

患話休題

かんわきゅうだい



院長
真崎 雅和



ムンプス難聴

流行性耳下腺炎(ムンプス)、いわゆる「おたふくかぜ」はムンプスウイルスの感染によって生じます。唾液などの飛沫や接触で感染し、2〜3週間の潜伏期間を経て発症します。典型的な症状は発熱、耳の下から顎の下にかけて(耳下腺、顎下腺)の腫れと痛みです。発症後7〜9日間は唾液中にウイルスが排泄されますが、特に5日目までは強い感染力を持っています。あまり知られてはいませんが、流行性耳下腺炎の合併症の1つに難聴があり、ムンプス難聴といえます。発症の前後約3週間(腫れる4日前〜腫れた後18日間)に生じ、重症の難聴であることが多く、治療を受けても回復が難しいという特徴があります。ムンプス難聴の発症率は、罹患した方の約1000人に1人と考えられています。全国の耳鼻咽喉科を対象とした調査では、2015〜16年の2年間で少なくとも348人が難聴となり、300人近くの方に後遺症(両耳難聴は16人)が残り、そのほとんどが重症の難聴でした。今回の調査は小児科を含まない耳鼻咽喉科単独の調査でしたので、実際にはもっと多いと推測されています。現在の日本では流行性耳下腺炎は持続的に流行しており、その原因の1つはワクチ

ンの接種率の低さ(30〜40%)であると考えられています。過去にはMMR(M・麻疹、M・ムンプス、R・風疹)ワクチンが定期接種化され、流行性耳下腺炎の流行は一時的に抑制されました。ところが、ムンプスワクチンの副反応である髄膜炎が問題となり、1993年にMMRワクチンからMR(麻疹、風疹)ワクチンへ変更され、ムンプスワクチンは任意接種となった背景があります。現在、先進国の中でムンプスワクチンが定期接種されていない国は日本だけです。海外で採用されているムンプスワクチンは日本のもとは種類が違いますが、定期接種されている国では流行性耳下腺炎の流行は少なく、ムンプス難聴もほとんど発症していないため、ムンプス難聴はムンプスワクチンで予防可能であると考えられています。他のワクチンと同様、副反応を完全になくすことは難しいようですが、より安全な新しいワクチンも開発中と聞きます。近い将来、より安全なワクチンで再び定期接種化されることを期待しています。



診察時間が近づいたことをお知らせする

約30分前
メールサービス

ご利用ください。
ご希望の方はメルアドを受付へ!!



急患随時受付

診療時間	月	火	水	木	金	土	日祝
午前 8:30~12:00	○	○	○	○	○	○	休診
午後 3:00~6:30	○	○	○	休診	○	3:00~4:00	休診

真崎耳鼻咽喉科医院

TEL.018-845-0234 FAX.018-847-1321
秋田市土崎港中央6-8-3